



Title	通常学級と特別支援学級に在籍する児童生徒における自傷行為の実態とその背景要因：学級環境、親・保護者、いじめ被害経験に注目して
Author(s)	穴水, ゆかり; Anamizu, Yukari; 太田, 正義 他
Citation	子ども発達臨床研究, 22, 85-102
Issue Date	2025-06-20
DOI	https://doi.org/10.14943/rcccd.22.85
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/95702
Type	departmental bulletin paper
File Information	07-18821707_22.pdf



特集論文

通常学級と特別支援学級に在籍する児童生徒における 自傷行為の実態とその背景要因：

学級環境、親・保護者、いじめ被害経験に注目して

穴水 ゆかり¹・太田 正義²・鈴木 修斗³・舒 悦⁴・加藤 弘通⁴

Current Conditions and Background Factors of Deliberate Self-harm among
Students in Normal Classroom and Special Needs Education Classroom:
Focus on Classroom Environment, Parents/Guardians and School Bullying Victimization Experiences.

Yukari ANAMIZU, Masayoshi OTA, Shuto SUZUKI, Yue SHU, Hiromichi KATO

要 旨

本研究では、通常学級と特別支援学級に通う小中学生の自傷行為の実態とその発達的变化、自傷行為と家庭環境や学校環境、いじめ被害経験との関連について検討することを目的とし、児童生徒 38,724 名を対象に質問紙調査を行った。その結果、通常学級では思春期前後に自傷経験率が高まる時期と低下する時期があり、その時期や自傷行為が深刻化する時期は男女で異なったが、特別支援学級では男女ともに一定の傾向はみられなかった。自傷との関連では、まず、学級内の不和をつくりだす児童生徒の存在と自傷経験の関連は、特に特別支援学級で強い可能性がみられた。一方、通常学級でみられた親・保護者との関係や関係的いじめとの関連は、特別支援学級では関連がみられず、特に児童では所属感よりも、穏やかで心を乱さない環境が求められる可能性がみられた。以上を踏まえ、学校種や通常学級と特別支援学級という学級種に応じた対応の必要性が考えられた。

キーワード：自傷行為、特別支援学級、学校環境、親・保護者、いじめ

deliberate self-harm, Classroom Environment, Special-needs Education, Parents/Guardians, School Bullying

問 題

これまで自傷行為を扱った研究では、その実態や、家庭環境、学校環境、いじめ被害経験等の関

連要因について、主に中学生や高校生を対象とした調査研究等により明らかにされてきた。たとえば、自傷行為の生涯自傷率では、13-19 歳の中学・高校生世代の男子では 3.1% ~ 50.6%、女子は 5.7%

¹ 拓殖大学北海道短期大学

² 常葉大学教育学部

³ 北海道大学教育学院・日本学術振興会

⁴ 北海道大学教育学研究院

～46.7%と、調査により大きな差がみられるといった知見がある (e.g., Madge et al., 2008; 関本・朝倉, 2017)。このような自傷行為の性差に着目した多くの研究では、女子の自傷経験は男子より多いと報告され (e.g., Pawłowska et al., 2016)、その開始時期に関しては12歳前後とする報告が多い (e.g., 濱田他, 2009)。さらに年齢や学年差に注目した自傷の様相の変化に関しては、Hawton et al. (2003) では女子の自傷は13-14歳にかけて急増する可能性が示され、Matsumoto et al. (2008) では女子では年齢による増減はあいまいで明確な差はみられなかったが、男子は中学生で増加していることが明らかにされている。しかし小学生の自傷行為については、小学5・6年生の自己切傷経験が男子5.4%、女子4.0%というShin et al. (2009) による報告や、小学校高学年では女子より男子、中学生と高校生では女子で自己切傷経験率が高いと報告したSho et al. (2009) の他にはあまりみられない。国内においては、日本学校保健会 (2024) が調査した、養護教諭が過去1年間で把握した児童生徒の自傷行為は、1,000人あたり小学校1.2人、中学校7.4人、高校3.5人だったが、児童生徒自身に尋ねた先行研究と比較すると、どの程度、児童生徒の実態を反映したものであるかは疑問が残る。つまり、これまでの研究から自傷行為には性別や年齢による差があることが推測されるが、国内外いずれにおいても自傷念慮や自傷経験率の年齢差に注目した調査や、年齢による自傷経験率の変化を、性差を含めて検討した研究はそれほど多くはない。特に自傷経験率が増加し始める小学校高学年から中学校入学前後の自傷念慮や自傷経験の実態及びその変化についてはいまだ不明な点が多い。

また、自傷行為を考える上では、多くの児童生徒にとって生活の大きな比重を占めている学校生活の視点が欠かせない。それだけに学校生活が快適なものであるかということは、児童生徒の心理状態に大きく影響している。たとえばHawton et al. (2003) の調査では、12-18歳の生徒の自傷行為は学期中の登校日に増加し、週末や休暇中、特に翌日も休日である日には減少する傾向がみられた。

これは、学校生活が児童生徒の自傷行為に強く関連している可能性を示しているといえる。他にも、自傷行為の背景要因として学校生活にかかわる先行研究を見ていくと、たとえば、自傷経験のある生徒は学習面の問題をもち (Pawłowska et al., 2016)、学業に秀でた学校では生徒の自傷経験率が低くなることが指摘されている (Shek & Lu, 2012)。仲間集団や友人関係については、仲間との葛藤 (Pawłowska et al., 2016) の他、自傷といじめの関連についても明らかにされてきている (e.g., O'Connor et al., 2009)。いじめについては、Brunner et al. (2014) では、仲間によるいじめを受けた経験は自傷経験のない生徒では4.9%だったが、自傷経験が4回以下の生徒では12.0%、5回以上繰り返した生徒では22.5%にのぼり、いじめの被害経験と自傷経験には関連があることが明らかにされている。同様の指摘は他の研究でもみられ、Klomek et al. (2016) は身体的・言語的いじめや関係的いじめは、いずれも自傷のリスクを高める要因であると報告している。また、自傷のリスクを下げる保護要因として、Klomek et al. (2016) は親や友人によるサポートを、Pawłowska et al. (2016) は男子のみについて友人からの励ましを挙げており、保護者や友人との関係も自傷行為には影響していると考えられる。

国内研究では、たとえば井尻 (2010) は、いじめ被害経験者は、非自傷経験者では30.2%を占めていることに対して、自傷経験者では52%と半数を超えていたと報告している。一方では、諸外国の研究と比較して、わが国では自傷行為と学校生活やいじめの関連について、実証的な研究が少ない。学校環境や学校生活が自傷行為にどのような影響を与え、それは年齢や学年が上がるごとにどのように変化していくのかについて注目した研究はあまりみられない。いじめについても、特にどのようなタイプのいじめが自傷行為に関連するのかは十分検討されておらず、自傷行為経験といじめ被害経験の関連が年齢や学年によってどのように変化するかについて注目した研究も少ない。しかし、自傷行為といじめの関連を明らかにすること

は、教員が児童生徒のいじめを見逃さずに感知するための、重要な手がかりにもなるだろう。

さらに、自傷行為の実態については、さきに述べたとおり小学生を対象とした調査自体が不足しているが、中学生以上を対象とした研究を含めて、通常学級と特別支援学級の区別をして行われた調査はあまりみられない。発達障害のある児童生徒の自傷行為について調査した研究は斎藤・斉藤(2014)や五十嵐・宮木(2020)など少なくはないが、それらは特別支援学校に通う児童生徒について教師や保護者に尋ねたものである。先に挙げた日本学校保健会(2024)による調査では、養護教諭により認知された自傷行為経験が小中高校の別で報告されたが、通常学級と特別支援学級の区別はない。特別支援学級に通う児童生徒の自傷行為に関する調査はあまりみられず、特別支援学級の自傷行為の実態やその背景要因がほとんど明らかになっていない。特別支援学級に在籍する児童生徒は知的障害、自閉症・情緒障害ばかりでなく、身体障害や身体虚弱など、それぞれが抱える困難が多様な上に、「特別支援学級に在籍している」ことが悩みやコンプレックス、いじめなど、自傷行為の背景となる問題につながる可能性も考えられるが、これらについて言及した先行研究はあまりみられない。しかし、特別支援学級に在籍する児童生徒の自傷行為について検討することは、学校における自傷対応について考えるときに、通常学級の児童生徒と同じ視点で支援するだけで十分なのかという課題にもつながるだろう。

以上の課題を整理すると、(1)小中学校に在籍する児童生徒を対象とした自傷行為の実態調査が不足しており、(2)小学生から中学生にかけての自傷行為の発達の变化についての検討が不十分であること、また(3)自傷行為の背景要因として考えられる家庭環境や学校環境、特にいじめ被害経

験との関連への検討が不十分であるといえる。したがって、本研究では、(1)～(3)について、通常学級と特別支援学級に通う児童生徒、それぞれについて明らかにしつつ検討していくことを目的とする。

方 法

1 調査協力者

A市の公立小中学校に通い、その学年になってから30日以上欠席者を除く児童生徒38,724名(Table 1)。

Table 1 調査協力者の内訳 人数

		通常学級	特別支援学級	合計
小学4年生	男子	3,357	106	3,463
	女子	3,324	41	3,365
小学5年生	男子	3,256	98	3,354
	女子	3,411	41	3,452
小学6年生	男子	3,133	89	3,222
	女子	3,148	29	3,177
中学1年生	男子	3,179	88	3,267
	女子	2,941	38	2,979
中学2年生	男子	3,023	71	3,094
	女子	2,930	54	2,984
中学3年生	男子	3,209	87	3,296
	女子	3,020	51	3,071
性別合計	男子	19,157	539	19,696
	女子	18,774	254	19,028
学級種別合計		37,931	793	38,724

2 調査の時期と手続き

A市の公立小中学校の児童生徒を対象とした悉皆調査である。回答方法については自宅で質問紙に記入後、封筒に入れて封をしたものを回収した。調査期間は201X年11月。

² 本調査では、穴水・太田・加藤(2023)と同一の調査対象、調査時期、手続き、質問紙を用いる。本研究の課題(1)(2)とやや関連するが、穴水・太田・加藤(2023)は、通常学級に通う児童生徒のみに着目して、自傷念慮及び自傷経験率を把握し、小学校高学年から中学校にかけての性差と経験率の変化について発達の捉え、検討したものである。一方で、本研究では通常学級と特別支援学級に通う児童生徒の自傷行為を比較検討し、特に(3)を主として扱う点で研究内容は異なるものと判断した。

3 調査内容

自傷念慮及び自傷行為の経験 穴水・太田・加藤（2023）と同様に、阿江他（2012）を使用した。「あなたは、自分で自分を傷つけた（たとえばかみそりなどで手首を傷つけるなど）経験がありますか」という質問について、「今の学年になってから」という教示のもと、「したことはないし、しようと思ったことはない」（以下、自傷経験なし）、「したことはないがしようと思ったことはある」（以下、自傷念慮）、「1度だけある（以下、一度ある）」「何度もある」の4件法で評定を求めた。

学級の雰囲気への認知 伊藤・宇佐美（2017）による「新版中学生用学級風土尺度」52項目のうち11項目を使用し、「学級内の不和」を示す1項目を加えた。さらに調査対象校と協議のうえ、調査項目を次の12項目に選定した。すなわち、①「学校活動への関与」因子：「行事などのクラス活動に一生懸命取り組む」「クラスの活動に自分から進んで参加する」、②「生徒間の親しさ」因子：「友だち同士、助け合う」「このクラスはみんな仲が良い」、③「学級への満足感」因子：「このクラスが気に入っている」「このクラスになって良かったと思っている」、④「学習への志向性」因子：「授業中よく集中している」「クラスのみんなはよく勉強をする」、⑤「規律正しさ」因子：「このクラスは、規則を守る」「このクラスは先生の指示にすばやく従う」、⑥「学級内の不和」因子：「みんなが逆らえない人がいる（逆転項目）」の1項目に、「自分たちの意見を押し通そうとする人たちがいる（逆転項目）」を加えた。回答は「まったくあてはまらない（1点）」から「よくあてはまる（5点）」の5件法で求めた。回答については『教師との関係』『親・保護者との関係』も同様とした。

教師との関係 大久保・青柳（2004）による「学校生活尺度」の下位尺度「教師との関係」を参考に、「先生は児童生徒の気持ちをわかってくれる」「困っているときに先生は励ましてくれる」「先生は児童生徒のことを真剣に聞いてくれる」の

3項目を作成、使用した。

親・保護者との関係 大久保・青柳（2004）を大久保・加藤（2010）が修正した「両親との関係」をもとに、「親・保護者は私のいうことを真剣に聞いてくれる」「親・保護者は私の気持ちをわかってくれる」「困っているときに親・保護者は励ましてくれる」の3項目を作成、使用した。

いじめの被害経験 「平成27年度 児童生徒の問題行動・不登校等生徒指導上の諸課題に関する調査」（文部科学省）を参考とし、さらに性被害に関する項目を加えて作成した。それぞれの項目は、①関係的いじめ：「仲間はずれや無視された（以下、仲間はずれ）」「かげで悪口をいわれた（以下、陰口）」、②直接的な言語的いじめ：「直接、悪口や嫌なことをいわれた（以下、言語的攻撃）」、③身体的いじめ：「なぐられたり、けられたりした（以下、身体的暴力）」「遊ぶふりをして軽くたたいたり、おされたりした（以下、ふざけ）」、④ネットいじめ：「パソコンや携帯電話、スマホを使って嫌なことをされた（以下、ネットいじめ）」、⑤性的ないじめ：「服を脱がされるなど、性的な嫌がらせを受けた（以下、性被害）」、⑥その他のいじめ：「ものを取られたり、かくされたりした（以下、物を盗る・隠す）」で、以上の8項目を使用した。「今の学年になってから」という教示のもと、評定は「まったくくない（1点）」「一度だけある（2点）」「月に一度くらいある（3点）」「週に一度くらいある（4点）」「週に何度もある（5点）」の5件法で求めた。

4 倫理的配慮

北海道大学大学院教育学研究院研究倫理審査委員会より承認（16-49）を受けた。

結 果

1 自傷念慮及び自傷行為経験の実態

Table 2は、小学4年生から中学3年生までの、現在の学年になってからの自傷念慮及び自傷行為の経験率を示したもので、Figure 1-Figure 4は通常学級及び特別支援学級に通う小学生及び中学

生の自傷念慮及び1回以上の自傷行為の経験率をグラフ化したものである。各グラフには、学年ごとの自傷経験率の推移を表すために多項式近似曲線を追加した。

また、通常学級及び特別支援学級に通う児童生徒それぞれの性別と学年が、自傷行為にどの程度関連するのかを検討するため、参照カテゴリーと

して「自傷経験なし」を基準(1)とした強制投入法による多項ロジスティック回帰分析を行った。小学生及び中学生の性別・学年を説明変数に、自殺念慮及び自傷行為を目的変数に多項ロジスティック回帰分析を行い、その関連性を検討した(Table 3-Table 6)。

Table 2 小学生及び中学生の自傷念慮及び自傷行為の経験率(通常学級・特別支援学級) %

		経験なし		自傷念慮		自傷行為		自傷行為の内訳			
		男子	女子	男子	女子	男子	女子	一度ある	何度もある	男子	女子
小学4年生	通常学級	80.15	83.84	10.11	10.08	9.74	6.08	6.28	4.41	3.46	1.67
	特別支援学級	83.67	91.43	7.14	0.00	9.18	8.57	4.08	8.57	5.10	0.00
小学5年生	通常学級	81.18	81.38	9.62	12.64	9.20	5.98	6.01	4.02	3.19	1.96
	特別支援学級	81.93	87.18	7.23	7.69	10.84	5.12	4.82	2.56	6.02	2.56
小学6年生	通常学級	83.51	81.01	9.28	13.67	7.21	4.23	4.50	3.38	2.71	1.95
	特別支援学級	85.53	88.89	6.58	7.41	7.89	3.70	5.26	0.00	2.63	3.70
中学1年生	通常学級	82.33	76.19	10.62	16.85	7.05	6.96	3.70	4.00	3.35	2.96
	特別支援学級	82.89	71.88	10.53	9.38	6.58	18.75	3.95	6.25	2.63	12.50
中学2年生	通常学級	81.23	75.26	10.69	15.60	8.08	9.14	4.44	4.53	3.64	4.61
	特別支援学級	67.80	70.00	10.17	14.00	22.03	16.00	15.25	6.00	6.78	10.00
中学3年生	通常学級	80.96	73.62	10.50	16.22	8.54	10.17	4.68	4.77	3.86	5.40
	特別支援学級	69.62	70.00	15.19	18.00	15.18	12.00	7.59	4.00	7.59	8.00

(1-1) 通常学級に通う児童生徒の自傷念慮及び自傷行為経験

通常学級に通う児童生徒の自傷念慮及び自傷行為経験の男女別・学年別による経験率については、穴水・太田・加藤(2023)にて報告されているが、特別支援学級に通う児童生徒との比較のため、ここでも Figure 1 及び Figure 2 を掲載するととも

に説明する。

Figure 1 は自傷念慮経験について、男女別・学年別による経験率を示したものである。男子では小学校では学年が上がるに従ってわずかに低下し、小学校6年生で最も低く、中学1年生ではわずかに高くなったが、小学校から中学校の6年間を通して大きな変化はみられなかった。女子は小学校

Figure 1 小中学生の自傷念慮経験(通常学級)

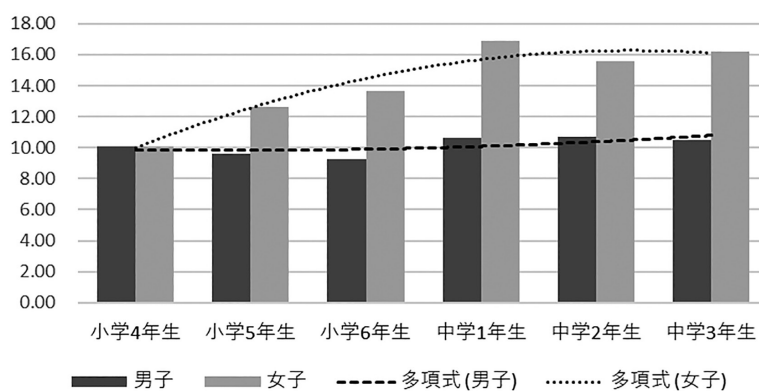


Figure 2 小中学生の一度以上の自傷行為経験（通常学級）

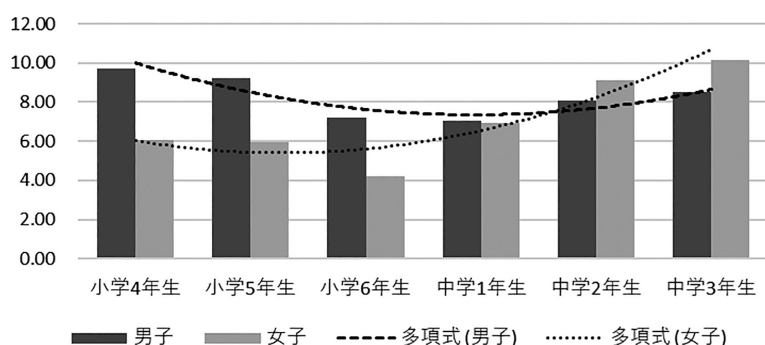


Figure 3 小中学生の自傷念慮経験（特別支援学級）

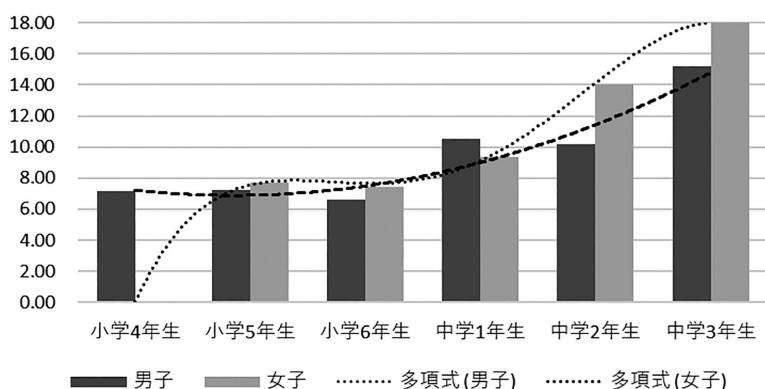
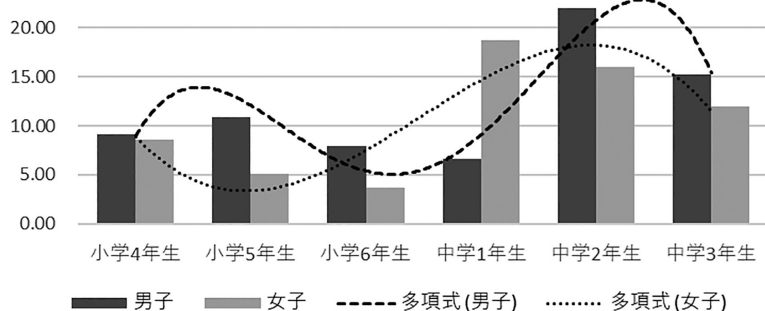


Figure 4 小中学生の一度以上の自傷行為経験（特別支援学級）



4～6年生にかけて高くなり、中学1年生以降は大きな変化がみられなかった。

Figure 2 は一度以上の自傷行為経験（以下、自傷経験）について示したものである。男子は中学1年生で自傷経験率が最も低くなり、その後はわずかに高くなった。女子は小学生では学年が上が

るとともに経験率がわずかながら低下し、小学6年生で最も経験率が低く、中学1年生以降はわずかに高くなった。また、小学生6年生までは男子のほうが自傷経験率は高いが、中学1年生では男女差がほとんどみられなくなり、中学2年生以降では逆転して女子の経験率が男子を上まわった。

(1-2) 特別支援学級に通う児童生徒の自傷念慮及び自傷行為経験

Figure 3 は自傷念慮経験について示したものである。男子については、小学校4～6年生までは7%前後であり増減はなく、中学1,2年生では約10%とやや増加し、3年生では15.19%となった。女子は小学4年生で0%だが、小学5,6年生では約7.5%で、中学1年生以降では上昇していき、中学3年生で18.00%となった。男女ともに自傷念慮は、学年が上がるにつれて増加した。男女で比較すると、小学5年生から中学1年生までは男女であまり差がみられず、中学2年生でわずかに女子のほうが高くなった。

Figure 4 は一度以上の自傷経験について示したものである。男子は小学4～5年生にかけて微増した後、小学6年生で7.89%、中学1年生6.58%と低下して再び中学2年生で22.03%と高くなり、3年生で15.18%となった。女子は、小学生では

学年が上がるとともに経験率が低下して小学6年生で3.70%と最も低く、中学1年生で18.75%と急に高くなり、その後は減少傾向がみられた。男女で比較すると、小学生6年生までは男子のほうが自傷経験率は高く、中学1年生では逆転して女子のほうが高くなるが、中学2年生以降では再び男子の経験率が女子を上まわった。

(1-3) 通常学級に通う児童生徒の自傷念慮及び自傷行為経験と性別・学年の関連

通常学級の小学生については Table 3、中学生は Table 4 の通りである。まず性別においては、小学生では自傷念慮は男子より女子が経験しやすく ($OR=1.24$, 95%CI[1.13-1.37])、自傷行為は女子より男子のほうが経験しやすい ($OR=0.70$, 95%CI[0.61-0.80; $OR=0.59$, 95%CI[0.49-0.72]) が、中学生になると自傷念慮 ($OR=1.66$, 95%CI[1.52-1.82]) 及び複数回の自傷行為 ($OR=1.30$,

Table 3 小学生の自傷念慮及び自傷行為と性別・学年の関連 (通常学級)

(多項ロジスティック回帰分析)

	自傷念慮 vs 自傷なし		一度ある vs 自傷なし		何度もある vs 自傷なし	
	OR	95%CI	OR	95%CI	OR	95%CI
性別(男=1,女=2)	1.24***	1.13-1.37	0.70***	0.61-0.80	0.59***	0.49-0.72
学年(小4=1…小6=3)	1.07*	1.01-1.13	0.86**	0.79-0.94	0.95	0.85-1.07
Nagelkerke R^2						.008

*** $p<.001$ ** $p<.01$ * $p<.05$

Table 4 中学生の自傷念慮及び自傷行為と性別・学年の関連 (通常学級)

(多項ロジスティック回帰分析)

	自傷念慮 vs 自傷なし		一度ある vs 自傷なし		何度もある vs 自傷なし	
	OR	95%CI	OR	95%CI	OR	95%CI
性別(男=1,女=2)	1.66***	1.52-1.82	0.13	0.97-1.31	1.30**	1.11-1.52
学年(中1=4…中3=6)	1.00	0.95-1.05	1.12*	1.02-1.23	1.22***	1.11-1.34
Nagelkerke R^2						.012

*** $p<.001$ ** $p<.01$ * $p<.05$

95%CI[1.11-1.52])は男子より女子のほうが経験しやすいことが示された。

学年の影響では、小学生の自傷念慮はごくわずかに学年が上がるごとに経験しやすくなる($OR=1.07$, 95%CI[1.01-1.13])、一度のみの自傷経験は学年が低いほど経験しやすくなる($OR=0.86$, 95%CI[0.79-0.94])ことが示された。中学生では、学年が上がるごとに自傷行為を経験しやすくなることが示された($OR=1.12$, 95%CI[1.01-1.23]; $OR=1.22$, 95%CI[1.11-1.34])。

(1-4) 特別支援学級に通う児童生徒の自傷念慮及び自傷行為経験と性別・学年の関連

特別支援学級の小学生についてはTable 5、中学生はTable 6の通りである。いずれも通常学級にはみられた性別や学年との関連はみられなかった。

2 自傷念慮・自傷行為経験の関連要因

ー学校環境、教師・親との関係

2.1 各尺度の信頼性

「学級の雰囲気への認知」尺度の6つの因子は各2項目のため、信頼性の算出はできなかったが、「学級の雰囲気への認知」尺度としての信頼性係数は $\alpha=.80$ だった。「教師との関係」尺度3項目の信頼性係数は $\alpha=.81$ で、「親・保護者との関係」尺度3項目の信頼性係数は $\alpha=.85$ だった。いずれも十分な信頼性が得られた。

2.2 自傷行為に関連する環境的要因

通常学級及び特別支援学級に通う児童生徒それぞれの環境が、自傷行為にどの程度関連するのかを検討するため、参照カテゴリーとして「自傷経験なし」を基準(1)とした強制投入法による多項ロジスティック回帰分析を行った。Table 7-10は通常学級と特別支援学級それぞれの小学生及び中学生について、環境要因(学級の雰囲気への認知、

Table 5 小学生の自傷念慮及び自傷行為と性別・学年の関連(特別支援学級)
(多項ロジスティック回帰分析)

	自傷念慮 vs 自傷なし		一度ある vs 自傷なし		何度もある vs 自傷なし	
	OR	95%CI	OR	95%CI	OR	95%CI
性別(男=1,女=2)	0.66	0.24-1.84	0.80	0.25-2.54	0.40	0.09-1.82
学年(小4=1…小6=3)	1.13	0.67-1.91	0.85	0.45-1.60	0.91	0.47-1.78
Nagelkerke R^2						.012

Table 6 中学生の自傷念慮及び自傷行為と性別・学年の関連(特別支援学級)
(多項ロジスティック回帰分析)

	自傷念慮 vs 自傷なし		一度ある vs 自傷なし		何度もある vs 自傷なし	
	OR	95%CI	OR	95%CI	OR	95%CI
性別(男=1,女=2)	1.20	0.63-2.30	0.65	0.26-1.61	1.80	0.79-4.12
学年(中1=4…中3=6)	1.35	0.91-2.01	1.18	0.72-1.95	1.21	0.73-2.02
Nagelkerke R^2						.022

教師との関係、保護者・親との関係)を説明変数に、自傷念慮及び自傷行為を目的変数に多項ロジスティック回帰分析を行い、その関連性を検討したものである。

(1)通常学級に通う児童生徒の自傷念慮及び自傷行為と環境要因の関連

① 小学生の自傷念慮及び自傷行為と環境要因の関連

通常学級の小学生についてはTable 7の通りである。「学級の雰囲気への認知」については、「学級活動への関与」では自傷行為が「一度ある」「何度もある」で影響がみられた(順に $OR=0.93$, $95\%CI[0.88-0.98]$; $OR=0.88$, $95\%CI[0.82-0.95]$)。「生徒間の親しさ」では自傷念慮及び自傷行為が「何度もある」で影響がみられた(順に $OR=0.96$, $95\%CI[0.92-1.00]$; $OR=0.90$, $95\%CI[0.83-0.92]$)。「学級内の不和」では、自傷念慮及び自傷行為が「一度ある」「何度もある」で影響がみられた(順に $OR=0.89$, $95\%CI[0.87-0.91]$; $OR=0.86$, $95\%CI[0.83-0.89]$; $OR=0.87$,

$95\%CI[0.83-0.92]$)。「学級への満足感」では、自傷念慮及び自傷行為が「何度もある」で影響がみられた(順に $OR=0.87$, $95\%CI[0.84-0.91]$; $OR=0.93$, $95\%CI[0.88-0.99]$)。「学習への志向性」では自傷念慮及び自傷行為が「何度もある」で影響がみられた(順に $OR=0.96$, $95\%CI[0.92-1.00]$; $OR=0.92$, $95\%CI[0.85-0.99]$)。「規律正しさ」「教師との関係」については関連がみられなかった。以上の通り、そのほとんどがわずかではあるが、学級全体の雰囲気をやよいと感じ、満足感を得ていること、児童間の仲が良いことや、学習に向かう気持ち、学級活動への積極的な関与があることが、自傷念慮や自傷行為の保護要因であり、学級内で不和をもたらし人がいるということはリスク要因となる可能性がみられた。学級内の秩序や、児童が認知している教師との関係性は、自傷念慮や自傷行為に影響していないことが示された。

「親・保護者との関係」では、自傷念慮及び自傷行為が「一度のみ」「何度もある」で影響がみられた(順に $OR=0.86$, $95\%CI[0.85-0.88]$; $OR=0.88$, $95\%CI[0.85-0.90]$; $OR=0.83$,

Table 7 小学生の自傷念慮及び自傷行為と環境要因の関連(通常学級)

(多項ロジスティック回帰分析)

	自傷念慮 vs 自傷なし		一度ある vs 自傷なし		何度もある vs 自傷なし	
	OR	95%CI	OR	95%CI	OR	95%CI
学級の雰囲気への認知						
学級活動への関与	0.97	0.93-1.00	0.93**	0.88-0.98	0.88***	0.82-0.95
生徒間の親しさ	0.96*	0.92-1.00	0.94	0.89-1.01	0.90**	0.83-0.97
学級内の不和	0.89***	0.87-0.91	0.86***	0.83-0.89	0.87***	0.83-0.92
学級への満足感	0.87***	0.84-0.9	0.96	0.91-1.00	0.93*	0.88-0.99
学習への志向性	0.96*	0.92-1.00	1.02	0.97-1.09	0.92*	0.85-0.99
規律正しさ	0.99	0.95-1.03	0.96	0.91-1.01	1.04	0.96-1.12
教師との関係	1.00	0.98-1.02	1.00	0.97-1.03	1.01	0.97-1.06
親・保護者との関係	0.86***	0.85-0.88	0.88***	0.85-0.9	0.83***	0.80-0.86
Nagelkerke R^2						.112

*** $p<.001$ ** $p<.01$ * $p<.05$

95%CI[0.80-0.86])。つまり、親や保護者とよい関係にあると感じている児童ほど、自傷念慮や自傷行為をやや経験しにくいことが示された。

② 中学生の自傷念慮及び自傷行為と環境要因の関連

通常学級の中学生については Table 8 の通りである。「学級の雰囲気への認知」については、まず、「学級活動への関与」では自傷行為が「一度ある」のみで影響がみられた ($OR=0.93$, 95%CI[0.87-0.98])。「学級内の不和」では、自傷念慮及び自傷行為が「一度ある」「何度もある」で影響がみられた (順に $OR=0.89$, 95%CI[0.87-0.91]; $OR=0.87$, 95%CI[0.84-0.90]; $OR=0.88$, 95%CI[0.84-0.91])。「学級への満足感」では、自傷念慮及び自傷行為が「一度ある」「何度もある」で影響がみられた (順に $OR=0.93$, 95%CI[0.90-0.96]; $OR=0.93$, 95%CI[0.88-0.97]; $OR=0.85$, 95%CI[0.81-0.90])。「学習への志向性」では自傷念慮でのみ影響がみ

られた ($OR=0.95$, 95%CI [0.91-0.98])。中学生では「生徒間の親しさ」「規律正しさ」「教師との関係性」については関連がみられなかった。以上の通り、わずかではあるが、学級全体の雰囲気をよいと感じ、満足感を得ていることの他、学習に向かう気持ちや、学級活動への積極的な関与は自傷念慮や自傷行為の保護要因であり、学級内で不和をもたらす人がいるということはリスク要因となる可能性がみられた。学級内の秩序や、生徒が認知している教師との関係性は自傷念慮や自傷行為に影響していないことが示された。

「親・保護者との関係」では、自傷念慮及び自傷行為が「一度のみ」「何度もある」で影響がみられた (順に $OR=0.85$, 95%CI[0.84-0.87]; $OR=0.86$, 95%CI[0.83-0.88]; $OR=0.80$, 95%CI[0.78-0.82])。つまり、親や保護者とよい関係にあると感じている児童ほど、自傷念慮や自傷行為をやや経験しにくいことが示された。

Table 8 中学生の自傷念慮及び自傷行為と環境要因の関連 (通常学級)

(多項ロジスティック回帰分析)

	自傷念慮 vs 自傷なし		一度ある vs 自傷なし		何度もある vs 自傷なし	
	OR	95%CI	OR	95%CI	OR	95%CI
学級の雰囲気への認知						
学級活動への関与	1.03	0.99-1.06	0.93*	0.87-0.98	1.02	0.96-1.09
生徒間の親しさ	0.97	0.93-1.02	0.96	0.90-1.03	0.94	0.87-1.01
学級内の不和	0.89***	0.87-0.91	0.87***	0.84-0.90	0.88***	0.84-0.91
学級への満足感	0.93***	0.90-0.96	0.93**	0.88-0.97	0.85***	0.81-0.90
学習への志向性	0.95**	0.91-0.98	0.96	0.90-1.02	0.96	0.91-1.03
規律正しさ	0.97	0.94-1.01	1.06	0.99-1.12	0.99	0.93-1.06
教師との関係	0.99	0.97-1.01	1.02	0.99-1.05	1.00	0.97-1.03
親・保護者との関係	0.85***	0.84-0.87	0.86***	0.83-0.88	0.80***	0.78-0.82
Nagelkerke R ²						.127

*** $p<.001$ ** $p<.01$ * $p<.05$

(2) 特別支援学級に通う児童生徒の自傷念慮及び自傷行為と環境要因の関連

① 小学生の自傷念慮及び自傷行為と環境要因の関連

特別支援学級の小学生については Table 9 の通りである。「学級の雰囲気への認知」については、「学級内の不和」では、自傷行為が「何度もある」で影響がみられ ($OR=0.70$, 95% $CI[0.52-0.94]$)、学級内に不和があると感じている生徒ほど、深刻な自傷行為を経験しやすいことが示された。「規律正しさ」では、自傷行為が「一度ある」で影響がみられた ($OR=0.65$, 95% $CI[0.44-0.97]$)。「学

級活動への関与」「生徒間の親しさ」「学級への満足感」「学習への志向性」「教師との関係」の他、「親・保護者との関係」についても関連がみられなかった。つまり、学級内の雰囲気を乱す同級生がいると感じている児童ほど、より深刻化した自傷行為を経験しやすく、教室内に秩序がないと感じている児童ほど、一度の自傷行為を経験しやすいという影響はみられたが、児童間の仲の良し悪しや、学習に向かう気持ち、学級活動への積極的な関与、児童が認知している教師や親、保護者との関係性は、自傷念慮や自傷行為に影響していないことが示された。

Table 9 小学生の自傷念慮及び自傷行為と環境要因の関連（特別支援学級）

（多項ロジスティック回帰分析）

	自傷念慮 vs 自傷なし		一度ある vs 自傷なし		何度もある vs 自傷なし	
	OR	95%CI	OR	95%CI	OR	95%CI
学級の雰囲気への認知						
学級活動への関与	0.77	0.56-1.05	0.82	0.57-1.18	0.66	0.43-1.01
生徒間の親しさ	0.72	0.48-1.09	0.99	0.62-1.60	1.39	0.73-2.65
学級内の不和	0.86	0.69-1.06	1.02	0.81-1.29	0.70*	0.52-0.94
学級への満足感	0.85	0.63-1.14	1.06	0.74-1.53	0.87	0.52-1.43
学習への志向性	1.01	0.71-1.42	1.40	0.93-2.11	1.17	0.68-2.00
規律正しさ	0.85	0.59-1.24	0.65*	0.44-0.97	0.98	0.56-1.71
教師との関係	1.10	0.85-1.42	1.01	0.76-1.34	1.09	0.76-1.55
親・保護者との関係	1.12	0.87-1.43	0.94	0.73-1.20	0.79	0.58-1.07
Nagelkerke R^2						0.240

* $p<.05$

② 中学生における自傷念慮及び自傷行為と性別・学年及び環境要因の関連

特別支援学級の中学生については Table 10 の通りである。「学級の雰囲気への認知」については、「学級活動への関与」では自傷念慮のみで影響がみられ ($OR=0.77$, 95% $CI[0.62-0.96]$)、学級活動に積極的に参加する生徒がいる学級ほど自傷念慮を経験しにくくなることが示された。「学級内の

不和」では、自傷念慮及び自傷行為が「一度のみ」で影響がみられた（順に $OR=0.85$, 95% $CI[0.72-0.99]$ ； $OR=0.72$, 95% $CI[0.57-0.90]$)。「学習への志向性」では、クラスの生徒が学習への意識や意欲があると感じる生徒ほど自傷念慮を経験しにくいことが示された ($OR=0.76$, 95% $CI[0.61-0.95]$)。「生徒間の親しさ」「学級への満足感」「規律正しさ」「教師との関係」「親・保護者との関係」について

は関連がみられなかった。つまり、クラスの生徒が学級活動や授業に積極的に取り組んでいると感じ、学級の雰囲気や乱す生徒はいないと感じている生徒ほど自傷念慮や自傷行為の経験をしにくいという影響がみられたが、児童間の仲の良し悪し

や、学級への満足感、規則を守り、先生の指示に従うという意味での学級内の秩序、生徒が認知している教師や親、保護者との関係性による自傷念慮や自傷行為に影響していないことが示された。

Table 10 中学生の自傷念慮及び自傷行為と環境要因の関連（特別支援学級）
（多項ロジスティック回帰分析）

	自傷念慮 vs 自傷なし		一度ある vs 自傷なし		何度もある vs 自傷なし	
	OR	95%CI	OR	95%CI	OR	95%CI
学級の雰囲気への認知						
学級活動への関与	0.77*	0.62-0.96	0.80	0.56-1.13	0.76	0.57-1.03
生徒間の親しさ	1.10	0.86-1.40	1.18	0.82-1.71	1.01	0.73-1.41
学級内の不和	0.85*	0.72-0.99	0.72**	0.57-0.90	0.81	0.66-1.01
学級への満足感	0.91	0.74-1.12	0.76	0.57-1.03	1.00	0.76-1.32
学習への志向性	0.76*	0.61-0.95	1.22	0.86-1.72	0.85	0.62-1.17
規律正しさ	1.11	0.87-1.41	0.82	0.57-1.16	1.12	0.80-1.56
教師との関係	1.11	0.94-1.31	1.11	0.88-1.40	0.86	0.71-1.04
親・保護者との関係	0.89	0.78-1.02	0.86	0.71-1.02	0.95	0.80-1.14
Nagelkerke R^2						0.245

** $p<.01$ * $p<.05$

3 自傷念慮・自傷行為経験の関連要因 ーいじめ被害経験

3.1 小学生及び中学生のいじめ被害経験の実態

(1) 通常学級及び特別支援学級に通う児童生徒のいじめ被害経験者の割合

Figure 5 は通常学級に通う児童生徒、Figure 6

は特別支援学級に通う児童生徒の、1 回以上のいじめ被害経験者の割合である。通常学級、特別支援学級ともに、男子は学年が上がるにつれていじめ被害経験は減少したが、女子は通常学級で中学2年生、特別支援学級では中学1年生までは減少傾向がみられ、その後は再び増加した。

Figure 5 学年別・男女別いじめ被害者の割合
（通常学級）

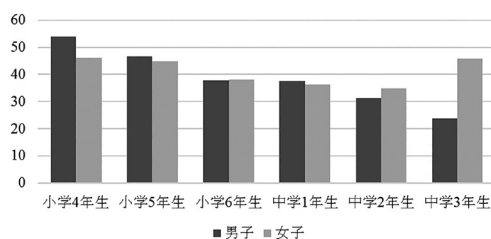
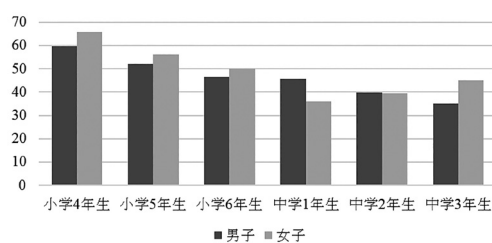


Figure 6 学年別・男女別いじめ被害者の割合
（特別支援学級）



(2) 通常学級及び特別支援学級に通う児童生徒の種別によるいじめ被害経験

Table 11 は通常学級、Table 12 は特別支援学

級に通う児童生徒におけるいじめ被害を内容別に尋ね、それぞれの項目に「ある」と答えた者の割合を示したものである。

Table 11 種別によるいじめ被害経験率

(通常学級)

%

		小4	小5	小6	中1	中2	中3
仲間はずれ	男子	25.58	20.44	15.40	14.10	11.89	9.68
	女子	24.86	23.00	17.94	17.68	15.48	12.23
物を盗る・隠す	男子	21.40	19.26	15.70	16.80	13.80	9.36
	女子	14.50	12.45	9.20	26.70	5.00	3.84
陰口	男子	20.00	19.86	16.76	16.60	15.36	12.30
	女子	22.60	27.80	25.33	8.10	28.12	24.29
身体的暴力	男子	26.13	19.70	15.45	13.57	10.61	7.30
	女子	9.93	7.40	5.61	3.75	2.17	2.20
言語的攻撃	男子	26.50	23.40	19.70	20.66	16.20	12.60
	女子	19.30	17.20	13.10	13.93	13.39	10.90
ネット	男子	1.20	1.20	1.89	2.75	3.90	3.80
	女子	0.60	1.20	2.50	4.95	6.00	6.50
いじめ	男子	22.67	18.80	15.97	15.89	13.92	10.16
	女子	14.59	14.80	11.62	9.00	6.95	4.59
ふざけ	男子	11.30	10.10	7.50	5.72	3.88	3.30
	女子	1.30	1.10	1.00	0.89	0.89	1.00
性被害	男子	53.98	46.69	37.85	37.60	31.36	23.81
	女子	46.23	44.87	38.15	36.44	34.84	45.90

Table 12 種別によるいじめ被害経験率

(特別支援学級)

%

		小4	小5	小6	中1	中2	中3
仲間はずれ	男子	26.00	25.53	25.58	16.67	20.59	16.47
	女子	21.95	43.90	21.43	16.22	18.52	25.49
物を盗る・隠す	男子	24.00	20.90	12.64	20.50	22.39	16.50
	女子	9.80	25.00	13.79	5.40	12.96	24.00
陰口	男子	15.30	26.88	25.30	18.29	17.65	10.60
	女子	36.60	35.00	20.70	18.92	24.53	18.00
身体的暴力	男子	28.28	28.57	25.00	15.70	16.18	15.12
	女子	19.51	12.20	13.79	10.80	9.43	13.73
言語的攻撃	男子	28.60	34.07	22.70	27.40	17.65	22.62
	女子	39.00	29.27	34.50	18.90	22.22	24.00
ネット	男子	3.00	4.50	4.60	0.00	1.50	4.71
	女子	0.00	2.40	0.00	5.41	1.90	6.12
いじめ	男子	20.41	21.11	20.69	19.28	13.24	17.65
	女子	34.15	19.51	10.34	8.11	9.26	16.00
ふざけ	男子	8.10	6.45	5.75	2.38	7.35	6.90
	女子	0.00	2.44	0.00	0.00	0.00	2.00
性被害	男子	59.60	52.17	46.59	45.78	39.71	35.23
	女子	65.85	56.10	50.00	36.11	39.6	45.10

3.2 自傷行為に関連するいじめ被害経験

(1) 通常学級に通う児童生徒の自傷念慮及び自傷行為といじめ被害経験の関連

① 小学生の自傷念慮及び自傷行為といじめ被害経験の関連

通常学級の小学生については Table 13 の通りである。「関係的いじめ」(順に $OR=1.23$, 95% CI : [1.19-1.27]; $OR=1.20$, 95% CI : [1.15-1.25];

$OR=1.27$, 95% CI : [1.20-1.34])、「言語的いじめ」(順に $OR=1.17$, 95% CI : [1.11-1.23]; $OR=1.25$, 95% CI : [1.14-1.38])、「身体的いじめ」(順に $OR=1.10$, 95% CI : [1.07-1.14]; $OR=1.15$, 95% CI : [1.13-1.26]; $OR=1.20$, 95% CI : [1.13-1.38]) という、すべてのタイプのいじめ被害経験が自傷念慮及び自傷行為「一度ある」「何度もある」に影響していることが示された。

Table 13 小学生の自傷念慮及び自傷行為といじめ被害経験率 (通常学級)

(多項ロジスティック回帰分析)

	自傷念慮 vs 自傷なし		一度ある vs 自傷なし		何度もある vs 自傷なし	
	OR	95% CI	OR	95% CI	OR	95% CI
関係的いじめ	1.23***	1.19-1.27	1.20***	1.15-1.25	1.27***	1.20-1.34
言語的いじめ	1.17***	1.11-1.23	1.12*	1.04-1.22	1.25***	1.14-1.38
身体的いじめ	1.10***	1.07-1.14	1.15***	1.10-1.21	1.20***	1.13-1.27
Nagelkerke R^2						.080

*** $p<.001$ * $p<.05$

② 中学生の自傷念慮及び自傷行為といじめ被害経験の関連

通常学級の中学生については Table 14 の通りである。自傷念慮及び「一度ある」「何度もある」に影響していたのは、「関係的いじめ」（順に $OR=1.34$, 95% CI : [1.30-1.39] ; $OR=1.38$, 95% CI : [1.31-1.44] ; $OR=1.48$, 95% CI : [1.42-1.55])

及び「身体的いじめ」（順に $OR=1.05$, 95% CI : [1.01-1.09] ; $OR=1.11$, 95% CI : [1.05-1.18] ; $OR=1.09$, 95% CI : [1.03-1.15])。「言語的いじめ」は自傷念慮及び自傷行為の「何度もある」に影響していた（順に $R=1.10$, 95% CI : [1.04-1.17] ; $OR=1.11$, 95% CI : [1.01-1.21]）。

Table 14 中学生の自傷念慮及び自傷行為といじめ被害経験率（通常学級）
（多項ロジスティック回帰分析）

	自傷念慮 vs 自傷なし		一度ある vs 自傷なし		何度もある vs 自傷なし	
	<i>OR</i>	95% <i>CI</i>	<i>OR</i>	95% <i>CI</i>	<i>OR</i>	95% <i>CI</i>
関係的いじめ	1.34***	1.30-1.39	1.38***	1.31-1.44	1.48***	1.42-1.55
言語的いじめ	1.10**	1.04-1.17	0.99	0.90-1.10	1.11*	1.01-1.21
身体的いじめ	1.05*	1.01-1.09	1.11***	1.05-1.18	1.09**	1.03-1.15
Nagelkerke R^2						.087

*** $p<.001$ ** $p<.01$ * $p<.05$

(2) 特別支援学級に通う児童生徒の自傷念慮及び自傷行為といじめ被害経験の関連

① 小学生の自傷念慮及び自傷行為といじめ被害経験の関連

特別支援学級の小学生については Table 15 の通りで、「言語的いじめ」で自傷念慮及び自傷行

為の「何度もある」で影響がみられた（順に $OR=1.69$, 95% CI : [1.18-2.42] ; $OR=1.96$, 95% CI : [1.24-3.12]）。通常学級でみられた「関係的いじめ」「身体的いじめ」との関連は、特別支援学級ではみられなかった。

Table 15 小学生の自傷念慮及び自傷行為といじめ被害経験率（特別支援学級）
（多項ロジスティック回帰分析）

	自傷念慮 vs 自傷なし		一度ある vs 自傷なし		何度もある vs 自傷なし	
	<i>OR</i>	95% <i>CI</i>	<i>OR</i>	95% <i>CI</i>	<i>OR</i>	95% <i>CI</i>
関係的いじめ	1.11	0.87-1.42	1.10	0.79-1.53	1.11	0.81-1.52
言語的いじめ	1.69**	1.18-2.42	1.23	0.76-1.97	1.96**	1.24-3.12
身体的いじめ	1.08	0.83-1.40	1.21	0.88-1.68	0.83	0.57-1.22
Nagelkerke R^2						.182

** $p<.01$

② 中学生の自傷念慮及び自傷行為といじめ被害経験の関連

特別支援学級の中学生については Table 16 の通りである。「身体的いじめ」では自傷念慮及び

自傷行為の「一度ある」自傷経験との関連がみられた(順に $OR=1.36$, 95% CI : [1.05-1.76]; $OR=1.61$, 95% CI : [1.18-2.18])。

Table 16 中学生の自傷念慮及び自傷行為といじめ被害経験率(特別支援学級)
(多項ロジスティック回帰分析)

	自傷念慮 vs 自傷なし		一度ある vs 自傷なし		何度もある vs 自傷なし	
	<i>OR</i>	95% <i>CI</i>	<i>OR</i>	95% <i>CI</i>	<i>OR</i>	95% <i>CI</i>
関係的いじめ	1.12	0.94-1.35	0.79	0.55-1.14	1.04	0.80-1.36
言語的いじめ	1.05	0.78-1.42	1.07	0.71-1.63	0.90	0.58-1.40
身体的いじめ	1.36*	1.05-1.76	1.61**	1.18-2.18	1.26	0.87-1.81
Nagelkerke R^2						.080

** $p<.01$ * $p<.05$

考 察

本研究の目的は、(1)小中学生の自傷行為の実態、(2)小学生から中学生にかけての自傷行為の発達的变化、(3)自傷行為の背景要因として考えられる家庭環境や学校環境、特にいじめ被害経験との関連、について、通常学級と特別支援学級に通う児童生徒、それぞれについて明らかにしつつ検討していくことだった。以下、この目的に沿って考察を加えていく。

1 自傷念慮及び自傷行為経験の実態について

通常学級の児童生徒では、男子の自傷念慮はいずれの学年においてもほぼ一定であり、自傷行為の経験率の推移に自傷念慮との関連はみられなかったが、女子では学年が上がるにつれて自傷念慮が高まり、それに伴って実際の自傷行為の経験率も増える傾向がみられた (Figure1 & Figure2)。このことについて穴水・太田・加藤 (2023) は、自傷行為の方法の男女差 (e.g., Brunner et al., 2014) をもとに、男子の自傷行為は突発的で衝動的な行為が多く、年齢とともに衝動をコントロールできるようになっていくに伴い減少するが、女

子は自傷念慮の高まりが実際の自傷行為へとつながっていく可能性があると推察している。また、通常学級の小学生では、自傷念慮は男子より女子のほうが経験しやすく、複数回の自傷行為は男子のほうが経験しやすかった。中学生では、自傷念慮及び複数回の自傷経験は、男子より女子のほうが経験しやすく、学年が上がるに従い、複数回にわたる自傷行為を経験しやすいという傾向がみられた。つまり、思春期前後では自傷念慮や自傷行為の経験率が高まる時期と低下する時期があり、その時期は男女で異なること、自傷行為が深刻化する時期も男女で異なることが示された。このことから、穴水・太田・加藤 (2023) も述べているように、自傷の予防教育や対策に際しては、男子では衝動性を抑えること、女子については自傷念慮の段階でその原因の除去や解決につなげることを視野に入れた検討が有用である可能性が考えられる。

一方、特別支援学級では、自傷念慮経験率は男女ともに学年が上がるにつれて高くなった (Figure3 & Figure4)。自傷経験率は、男子は中学1年生、女子は小学6年生で最も低くなり、中学生頃から自傷経験率が高くなる点では通常学級と

似ているものの、男女ともに学年によって経験率にばらつきがあり、一定の傾向はみられなかった。自傷念慮や自傷行為が深刻化する時期も確認できなかったが、特別支援学級では男子でも自傷念慮段階での対応が有用である可能性があり、思春期前後で自傷行為が増加しやすいことを念頭に置いて児童生徒の観察をする必要があると考えられる。

2 自傷行為に関連する環境的要因

Table7 & Table10 の通り、通常学級の中学生や特別支援学級では、児童生徒、個人間の仲の良さや相互援助性を示す「生徒間の親しさ」は自傷念慮や自傷行為には影響していなかったが、「みんなが逆らえない」「自分たちの意見を押し通そうとする」という、学級内の不和をつくりだしている児童生徒の存在は、通常学級、特別支援学級ともにみられた。このため、教室内の人間関係にネガティブな影響を与える児童生徒の存在そのものばかりでなく、そのような児童生徒の存在を許している教室の雰囲気や児童生徒の自傷行為に影響している可能性が考えられる。自傷念慮や自傷行為は学級内の不和をつくり出している児童生徒から影響を受けている可能性がみられた一方で、自傷経験のある生徒はネガティブな思考をもつ傾向があり (Björhed & Lundh, 2008)、他者の反応や対応などを敏感にネガティブに捉えるという認知の癖や傾向をもちやすく、ポジティブな関係性ではなく、ネガティブに認知している関係性から影響を受けている可能性があるのだとも考えられる。言い換えると、ポジティブな児童生徒間の関係は自傷行為の促進要因にも抑制要因にもなりにくい、ネガティブな関係性は自傷行為の促進要因として影響している可能性がある。それは特別支援学級の児童生徒により強い可能性がみられた。

特に1日の多くの時間を学級で過ごす小学生や、通常学級よりも教師の目が行き届きやすい特別支援学級の児童生徒では、教師との関係性が強く、それが自傷経験にも影響することを予想したが、本調査では教師との関係性と自傷との関連はみら

れなかった。この点だけをみると、教師は直接的には、自傷行為の原因にも抑止力にもならないと考えられる。しかし三島・宇野 (2004) は、児童が認知する教師の受容的・親近的な態度や特性、自信のある対応や態度、客観的な視点をもった児童対応と、学級の雰囲気には強い関連があることを明らかにしている。本研究では、特に通常学級では学級全体の雰囲気や満足感、行事等への積極的な参加など、学級の雰囲気を示す4つの項目への認知は、児童生徒の自傷念慮や自傷行為にポジティブにやや影響していた。それぞれが弱くややばらつきがあるため、このことについての検討は今後の課題であるが、児童生徒の自傷の問題には、教師と児童生徒との個と個の関係性よりも、教師による「よい雰囲気」の学級づくりがかかわっているのだとすれば、教師は学級づくりを通して、間接的に児童生徒の自傷に影響していると考えられる。

親・保護者との関係については、通常学級の児童生徒では「親・保護者との関係」がよいと認知している児童生徒ほど自傷念慮や自傷行為の経験をしにくい、特別支援学級では関連がみられなかった。特別支援学級や特別支援学校に通う児童生徒の親子関係や愛着関係の実態を明らかにした研究は多くないため、確かなことは言いえないものの、通常学級と特別支援学級に通う児童生徒が認知する親子関係には異なるものがあるのかもしれない。したがって、通常学級と特別支援学級の児童生徒が親子関係をどのように認知しているのか、また、それがどのように子どもの問題に影響しているのかについては、今後さらに検討を重ねる必要があるだろう。

3 自傷行為に関連するいじめ被害経験

Table13 & Table14 にみられた通り、通常学級の児童では言語的・身体的・関係的いじめのすべてが自傷念慮及び自傷行為に影響し、特に関係的・言語的いじめが自傷経験で影響しやすいことが示された。中学生ではさらに「関係的いじめ」の影響が強くなった。国内研究ではいじめのタイプご

とに自傷行為との関連を調べた調査はあまりみられないが、Klomek et al.(2016) は、身体的・言語的・関係的いじめは、いずれも自傷のリスクを高める要因であると報告している。本研究でも、通常学級の児童生徒に関しては先行研究を支持するものとなった。しかし特別支援学級では、小学生では言語的いじめ、中学生では身体的いじめとの関連がみられ、いずれも他者とのかかわりに関連する「関係的いじめ」の影響はみられなかった。先述の環境要因でみられた「生徒間の親しさ」「学級への満足感」「学級内の不和」と自傷念慮及び自傷行為の関連から (Table 7 & Table10)、通常学級の児童では友人・仲間との個人的な関係、児童生徒では学級など集団への所属感が自傷念慮や自傷行為に影響するが、特別支援学級の児童生徒、特に児童では、所属感よりもむしろ、穏やかで心を乱さない環境が求められている可能性が考えられる。

以上の通り、通常学級と特別支援学級の児童生徒では、学校生活の中で重要であることがやや異なる可能性はあるが、いずれにせよ、教師は自傷を行う児童生徒の人間関係や問題の背後に目を向けること、いじめを早期に発見する敏感さをもつ必要がある。

本研究の限界と今後の展開

本研究の限界はいくつかある。まず、特別支援学級に通う児童生徒は自傷念慮者 68 名、自傷経験者 80 名と比較的少人数であること (Table 2)、さらに在籍者は、知的障害や自閉症・情緒障害ばかりでなく、身体障害や身体虚弱をもつ児童生徒など多岐にわたること、通常学級と支援学級間の移籍もよく行われていることが、自傷経験の学年的推移や自傷行為の背景となる学校環境やいじめとの関連等について把握しにくいものにしたと考えられる。本研究は、通常学級と特別支援学級の比較により、学級づくりをする上での留意点を見出すものとなったが、今後は児童生徒の置かれた具体的な状況により注目し、状況に応じた自傷対

応について検討することも必要と考えられる。

文 献

- 阿江竜介・中村好一・坪井聡・古城隆雄・吉田穂波・北村邦夫 (2012). わが国における自傷行為の実態 -2010 年全国調査データの解析 - 日本公衛誌, 59-9, 665-674.
- 穴水ゆかり・太田正義・加藤弘通 (2023). 小学生および中学生の自傷念慮・自傷行為経験の実態: 性差・発達差に注目して 臨床心理学, 138, 706-710.
- Brunner, R., Kaess, M., Parzer, P., Fischer, G., Carli, V., Hoven, C.W., ... Wasserman, D. (2014). Life-time prevalence and psychosocial correlates of adolescent direct self-injurious behavior: A comparative study of findings in 11 European countries. *Journal of Child Psychology and Psychiatry*, 55(4), 337-348.
- 濱田祥子・村瀬聡美・大高一則・金子一史・吉住隆弘・本城秀次 (2009). 高校生の自傷行為の特徴 - 行為後との経験率と自傷行為前後の感情に着目して - 児童青年精神医学とその近接領域, 50(5), 504-516.
- Hawton, K., Hall, S., Simkin, S., Bale, E., Bond, A., Codd, S., & Stewart, A. (2003). Deliberate Self-harm in adolescents: a study of characteristics and trend in Oxford 1990-2000. *Journal of Child Psychology and Psychiatry*, 44(8), 1191-1198.
- 五十嵐一徳・宮木秀雄 (2020). 特別支援学校 (知的障害) における児童生徒の自傷行動と支援に関する調査研究 - コミュニケーションとの関連及び自傷行動の機能に焦点を当てて - 特殊教育学研究, 58(3), 151-163.
- 伊尻 正一 (2010). 自傷行為におけるいじめ・不登校経験等の影響 東日本国際大学福祉環境学部研究紀要, 6 (1), 37-47.
- 伊藤亜矢子・宇佐美慧 (2017). 新版中学生用学級風土尺度 (Class room Climate Inventory) 教育心理学研究, 65(1), 91-105.
- Klomek, A.B., Snir, A., Apter, A., Carli, V., Wasserman, C., Hadlaczky, G., ... Wasserman, D. (2016). Association between victimization by bullying and direct self-injurious behavior among adolescence in Europe: a ten country study. *European Child and Adolescent Psychiatry*, 25, 1183-1193.
- Madge, N., Hewitt, A., Hawton, K., Wilde, E.J., Corcoran, P., Fekete, S., ... Ystgaard, M. (2008). Deliberate self-harm within an international community sample of young

- people: comparative findings from the Child & Adolescent Self-harm in Europe (CASE) Study. *Journal of Child Psychology and Psychiatry*, 49(6), 667-677.
- Matsumoto. T., Imamura. F., Chiba. Y., Katsumata. Y., Kitani. M., & Takeshima. T. (2008). Prevalences of lifetime histories of self-cutting and suicidal ideation in Japanese adolescents: Differences by age. *Psychiatry and Clinical Neurosciences*, 62, 362-364.
- 文部科学省 (2016). 平成 27 年度 児童生徒の問題行動・不登校等生徒指導上の諸課題に関する調査 https://www.mext.go.jp/b_menu/houdou/28/10/_icsFiles/afieldfile/2016/10/27/1378692_001.pdf (2024 年 5 月 13 日)
- 日本学校保健会 (2024). 保健室利用状況に関する調査報告書—令和 4 年度調査結果—, 19.
- O'Connor. R. C., Rasmussen. S., Miles. J., & Hawton. K. (2009). Self-harm in adolescents: self-report survey. *The British Journal of Psychiatry*, 194(1), 68-72.
- 大久保智生・青柳肇 (2004). 中高生用学校生活尺度の作成と信頼性・妥当性の検討 日本福祉教育専門 学校研究紀要, 12, 9-15.
- 大久保智生・加藤弘通 (2010). 中学生の問題行動とその動機の語彙との関連 - 中和化の技術に注目して 香川大学教育学部研究報告, 134, 1-12.
- Pawłowska, B., Potembska, E., Zygo, M., Olajosy, M., & Dziurzyńska, E. (2016). Prevalence of self-injury performed by adolescents aged 16-19 years. *Psychiatria polska*, 50(1), 29-42.
- 斎藤ゆかり・斉藤ふくみ (2014). 知的障がい者における自傷行為の実態及びそれに対する気づきと支援について. 茨城大学教育学部紀要 (教育総合) 増刊号 (2014), 361-371.
- 関本富美子・朝倉隆司 (2017). 中学生における自傷行為の経験率、性差と心理社会的要因 - 神奈川県の公立中学校における疫学調査 - 東京学芸大学紀要 芸術・スポーツ科学系, 69, 183-191.
- Shek, D.T.L., & Lu, Y. (2012). Self-Harm and Suicidal Behaviors in Hong Kong Adolescents: Prevalence and Psychosocial Correlates. *The Scientific World Journal*, Article ID 932540, 14.
- Shin, Y.M., Chung, Y.K., Lim, K.Y., Lee, Y.M., Oh, E.Y., & Cho, S.M. (2009). Childhood Predictors of Deliberate Self-Harm Behavior and Suicide Ideation in Korean Adolescents: A Prospective Population-Based Follow-Up Study. *Journal of Korean Medical Science*, 24, 215-222.
- Sho, N., Oiji. A., Konno. C., Toyohara. K., Minami. T., Arai. T., Seike. Y. (2009). Relationship of intentional self-harm using sharp objects with depressive and dissociative tendencies in pre-adolescence-adolescence. *Psychiatry and Clinical Neurosciences*, 63(3), 410-416.
- Takizawa, R., Maughan, B., & Arseneault, R. (2014). Adult Health Outcomes of Childhood Bullying Victimization: Evidence from a Five-Decade Longitudinal British Birth Cohort. *The American Journal of Psychiatry*, 171(7), 777-784.